

# 美的価値論考

五十嵐 嘉 晴

## 1

価値とは、要求を満たすものであり、様々な種類の価値がある。それらは、物質的価値と精神的価値に分類されたり、個人的価値、社会的価値、自然的価値、理想的価値に区別されたり、定在的（実存的）価値、目的価値、規範的価値に分けて考えられたり、色々な視点から分析されている。美的価値も、これら諸価値概念と関係して考察されるべきであろう。近代における価値論は、ルドルフ・ロツェが関係概念を〈妥当すること〉を中心に解明しようとしたことを継いで、新カント学派がそれを価値問題の案内として展開し、文化哲学や歴史学の基礎づけしようとした。すなわちヴィンデルバントは、文化価値の妥当性から生活規範を知ろうとし、リッケルトは、その個性化に注目した歴史論を提起した。米国では、デューイなどのプラグマイズムの立場から、価値判断を好みと値ぶみに手段的に基づいたものとして論じた。また近年ではマルクス主義でも、経済的価値論だけでなく、根本的に価値一般の哲学的理論構築への努力が見られる。価値研究へのこれらとその他諸々のアプローチを概観して、我々も価値存立の根拠について基礎的な理解を先ず行なわなければならない必要を知る。そこで我々は、形面上学的実体に根拠をあらかじめ置く方針からではなく、基本的に人間の生命とか生活と価値の関係を考察する方向から進んで行く事としたい。

アグネス・ヘラーは自分の価値論仮説を、人間の類的な本質諸力の発展を源として論考する。彼女は、ジェルジ・マルクシュと共に、「類的存在の契機とは、社会性－労働（生産、まったく一般的に言えば客体化）－自由－意識性－一般性である。これらが人間の本質諸力である。」と

考える。<sup>(1)</sup> そしてマルクスの見解に拠って、〈富〉を根本的価値概念とし、これは類的な本質諸力を多面的に伸ばしたことでであると解釈する。これに基づいて、次の様に言う。「第一の価値公理は、価値とは類的な本質諸力を豊かにさせるのに必要ないっさいのもの、それを助けるいっさいのものだ、ということである。第二の価値公理は、最高の価値とは個人が類的な富を自分のものにすることができるような状態であるということである。」<sup>(2)</sup>

人間の本質諸力の発達の契機については、さらに次の様な説明が加えられる。「そのうちでもっとも重要なのは、自然の制限の後退であり、しかもそれは相互に関連した三つの意味においてである。第一は、生産の発展ないし（目標としてつかみとられた）生産の意識的な発展である。それは、人間の生産能力の発達、すなわち『人間の生産諸力の発展、したがって自己目的としての人間的・自然の富の発展』に一致する。これは同時に使用価値の富の前提と原動力であり、同時に『社会そのものから生まれてくる新たな欲望の発見、創造、充足であり、社会的人間のすべての特性の開発、および特性や関係に富むがゆえに欲望にもこのうえなく富んでいるそうした社会的人間の生産』である（価値の物差としての『富』はどこにでもあることに注意しよう）。自然の制限の後退の第二の意味は、社会の『自然性』の克服、『純粋な』社会関係の成立である。第三の意味は、個人の欲望がますます人間的に（いいかえれば、社会的に、自由に、自覚的にかつ一般的に）なることによって、個人自身のなかのこの制限が抑えこまれることにある。」<sup>(3)</sup> 人間性の発達は、この指摘の様に、社会的人工と結びつけて考えられる。ただし我々は、この場合、自然の制限が後退するからといって、

人間の本来的自然性が否定される訳ではないと考える。人間の生物的自然性は消失しないし、人間的な自然も発展するのである。そして我々は、人工的な自然あるいは自然的人工と価値との関係に注目したい。

アグネス・ヘラーは、価値と社会性の密着をさらに次の様に強調する。「価値とは何か。一種の〔中略〕意識的な選好である。意識的な選好は、社会性の一契機である。だから、社会性と同時に存在し、社会性があるかぎり存在しなければならない。」<sup>(4)</sup>「つぎの二つの条件がついた場合に、選好は価値選好と考えることができる。すなわち、(一)この選好が社会的に規制されている（習俗、規範のなかに客体化されている）場合、ないし個人的な選好がそうした習俗と規範への関係をあらわしている場合、この関係が、破られ、廃棄され、古くさいものとされ、変容されるなかで表現される場合ですらそうである。(二)この選好が個別性を止揚する普遍化の契機を含んでいる（志向している）場合である。」<sup>(5)</sup>美的価値が意識的な選好であるとしても、美意識においてその価値意識や価値の意味は、必ずしも意識されている訳ではないであろう。また無意識なものが、美的価値の形式に参与することもある。とはいえ美的価値は、意識と共にあり、極めて選好的であることには間違いはない。また価値が個人的なものであっても、社会性と一般化への方向を持っていることに留意しなければならない。

「価値でありうるのは、外的世界の現象（対象、物、材料、事件、行為）ならびに思考の事実（観念、形象、科学的な構想）である。価値とは、われわれが評価するもの、すなわち評価の対象である。」<sup>(6)</sup>という見解がある。しかし「価値は、価値物の属性ではない」<sup>(7)</sup>という風にも言える。すなわち対象は、ある種の選択において価値として機能し、価値指向カテゴリーが適用されて、ある意味を帯びるのである。<sup>(8)</sup>我々は美的価値を分析する際に、このような評価関係において、人間と内的・外的自然、人間の本質諸力の発展（特にその社会性）が美と如何に関連しているかを考察しなければならないであろう。

## 2

価値は対象の特性ではないとするヘラーは、価値対象そのもののなかにある潜勢力によって、選好がそれと関係づけられて価値があらわれるとか、精神的価値はそうした対象への〈応答〉、価値応答であるという風な説明をしている。<sup>(9)</sup>この事情については、高田純氏の次の説明が解りやすいと思われる。<sup>(10)</sup>価値は価値物と区別されるが、遊離してはありえない。「発生的に言えば、価値の観念は、個々の価値物についての価値体験の普遍化として生じるが、しかし、これらの価値体験のたんなる積み重ねや総和から直接えられるのではなく、その過程には飛躍が介在している。」価値は『のぞましいもの(のぞましき)』であって、これは「一種の理想性、『超越性』をもっていて、これに完全に適合する対象は必ずしも実在しない。」そしてこの『のぞましいもの』を尺度にして、対象が価値評価される。

この見解を美的価値に適用すると、我々は次の様に言えよう。美的価値は、対象についての美的体験の普遍化から生じる。美的価値は一種の理想であり、それに完全に適合する対象は必ずしも実在しない。美的価値の成立には、美的体験が基本的に重要な契機である。美的体験には色々の種類や階段があり、それに応じて、各種・各位相の美的価値があることになる。

体験は、人間主体の状況に密着した係りがあり、価値も主体と深く結びついて成立すると考えられる。しかし価値主体が対象に価値を付与するものであるとか、価値物を構成すると言い切るのは、観念論的単純化である。価値における主体と客体との相互規定を、高田氏は次の様に言う。「まず、価値意識は、原初的には価値の主体と客体との矛盾の主体のかわへの映現から出発する。そして、この主体的な映現物が再び、だがより高い次元で客体へとむけられることによって、本来の意味での価値と価値意識が成立する。」<sup>(11)</sup>それは、価値判断の場の成立である。これらの事を踏えて、美的価値の体験と判断を考察しなければならない。

木幡順三教授は、美的価値体験を分析して、

以下の7項に要約している。<sup>(12)</sup>

(一) 美的価値の体験は主観と客観の相関関係をふまえて成立している。認識活動では客観優位、実践では主観優位の関係であるに対して、美的価値体験では、主客に微妙なバランスが保たれていて、主観なくして客観なく、客観を抜きにして主観はみとめられない。この関係には現象学的分析が殊に有効であって、意識はつねに〈何ものかについての意識〉であるという意識の志向性と、それにもとづき対象が意識に自己能与することから、美的価値の体験は志向的体験であるとされる。

(二) 美的価値の体験は直観的体験である。この美的直接性は、フォルケルトにならって、没概念性および没意志性ということばで特徴づけることもできる。体験は単なる知識とちがって、はるかに重かつ大な主観的意識を自我にもらす。美的直接性は、対象の概念構成に際して失われるものを回復蘇生させる。

(三) 美的直接性は日常的直接性から区別されたものである。日常生活の基本をなす生活実践上の直接性に比べると、美的直接性は意識に与えられたものの感性的品質を保持するところに生じ、そこに美的品質が成立する。

(四) 意識に対する〈与えられかた〉が同じであったとしても、対象の美的品質に種々の区別が生じる。それは、対象的意味の志向的構成方式が異なるからである。

(五) 美的対象を〈体験するしかた〉、〈体験過程そのもの〉に認められる独自性は、それが価値体験であるかぎり、その主体たる人間存在に一般に属すべき**頽落現象**を伴い、しかも美的価値の体験がまさしく美的価値の体験であるかぎり、**崩落現象**を示すということが、ゾルガーやベッカーの指摘によって言える。美的体験は緊張の上に成立しているので、その対象は尖端性を持ち、それ故にそこなわれやすく、体験過程は上昇と降下の激変点へ屹立しているので、美は脆さやはかなさを特徴としている。

(六) 美的価値体験には、美意識における固有の自己意識の形成がある。それは対象志向と同時に生じ、対象意識にともなう反省作用である。

美的判断の妥当性は、超越論的主観性の立場からみた美的な相互主観性によって成立する。このようにして、美的価値の体験はまた美的方向から自我論の一面を照射する哲学的体験である。(七) 美的価値体験は二側面を備えている。〈美的な価値体験〉として主観的意識的統一性が強調される面と、〈美的価値の体験〉として客観対象の統一性が強調される面である。後者の場合、美的価値はその根拠をかならずしも意識体験のうちにもたなくともよく、たとえば数学的、生理学的、物理学的、宇宙論的、形而上学的、神学的原理など、超意識的な超越的価値根拠に支えられた美を、部分的にか全面的にか、ともかく意識内在化することが主要な点である。前者では、価値は価値体験として、認識体験、実践体験、宗教的体験などあるうちの一特殊相として美的体験が考えられ、美は内在的価値であって、その成立根拠はもっぱら意識の機能・構造的特性に求められるものである。

木幡氏の上記の分析は、美的体験の特性をかなり指摘していると思われるので、参考となる。しかしこの問題へのアプローチは、彼の行った仕方に限られるのでもないし、彼の分析が十全に問題点を整理し掘り下げている訳でもない。たとえば、美的価値体験と人間生活や理想との係りがあまり追究されていない。各項目の内容についても、それぞれ再吟味が求められよう。今それを詳細に展開する用意を我々は未だ持っていないので、木幡氏の言及に誘われて出て来た幾つかの問題方向を提示しておくだけとする。(一)については、美的志向性の規定と根拠についての分析が求められる。(二)では、美の感性的特質と人間の生命の関係からの解明が要請されるし、また美において概念や意志が没しているかどうか再検討してみる必要がある。(三)は、美的品質の成立を十分に説明していない点(何故なら感性的品質を保った日常性もあるから)と、逆に日常性における美をどう考えるかの点が弱点であろう。(四)においては、志向性構成の差異の根拠まで進んで行きたい。(五)の標徴は、はたして美一般に適用出来るのか、それともその特殊な一様相であるのかがやはりもう一度検討さ

れるべきであろう。(内)も色々の問題を持っているが、そのうちの一つには、例えば美的体験を哲学的体験と言えるかどうかがある。(七)の中で後者と言われたものは、本当に超越的根拠なのか、前者では美的価値体験と認識や実践との係りも考察されるべきである。

美的価値体験は、美的価値判断と密接している。そこで続いて、同じく木幡教授がヨナス・コーンのこの点に関する分析により示した美的判断の特徴を見ることとする。<sup>(13)</sup>

(1) 直感性。カントが趣味判断と認識判断の区別として規定した通りである。

(2) 自己目的性。美は自己目的的な内包的(intensiv)価値であって、手段的価値たる結果的(konsekutiv)価値ではない。ただし結果的価値である有用性と美は排斥する訳ではない。美と用の重合はただただ偶然的である。

(3) 個別性。美は具象的な個物にやどる。同じく内包的価値である真や善が、大きな連関のうちにおかれてこそ価値となる、超在的(trans-gredient)価値であるに対して、美はその連関なしに価値でありうる内在的(immanent)価値である。

(4) 妥当の要求性。美的価値の妥当性は主観的である。美的判断は主観的恣意に留まるのではなく、妥当の権利要求を行なって各々の判断主観に拘束を加える。この拘束は、超越論的(先験的 transzendental)な制約である。美的価値は主観的普遍性をもっているといえる。このような拘束は、カントが範例的(exemplarisch)と呼ぶものである。

木幡氏はこれに加えて、ローマン・インガルデンの指摘から、価値そのものと価値判断を区別して、前者にアー・プリアリ性、後者に経験的相対性があるとする。例えば、対象のもつ美的に価値ある品質に対しても、往々にして非美的価値判断——たとえば宗教的価値判断——が下されることもある。

我々も、価値と価値判断(評価)との区別や関係に留意しておく必要があるだろう。価値は要求を満すべき望ましきものであり、肯定的なものであるに対して、評価は肯定的でも否定的でも

あり得る。価値意識(価値判断の総体)は、価値に基づく。評価の基準は、価値である。そして価値関係のないところには、価値はあらわれないであろう。だからと言って、価値はアー・プリアリだとは決められない。ともかくある価値判断は、その判定する価値の性質と結びついていて。だから木幡氏の挙げた美的判断の特徴は、美的価値の性質を示さんとするものでもあった。

ところでこれについては、美の性質を一定の面ではよく表しているとはいえ、次の批判的評註を加えたいと思う。

(1) 美的価値の直感性は重要な特徴であるが、その事によって認識と峻別されるべきとは考えられない。何故なら美は、バウムガルテン流の意味ではなくとも、感性的認識の面を持つと言えようからである。また美は論理的思考でないが、概念との係りを全く消去する訳にはいかないであろうし、抽象性も美の契機として認めることが出来ると思われる。

(2) 美の純粋性や独立性を、我々も認めるのに吝でない。しかし一見自己目的的なその性格も、根底において社会性や他の価値との関連の上に成立していると思われる。また有用性との結びつきが偶然的なら、美の人類にとっての成立や意義も理由が薄弱となる。

(3) 美が個別に存することや、個性を特徴とすることは認められる。だからと言って、美的価値を大きな関連から切断する必要もないし、自己目的性と合せて全体性から離れたものと解すべきでもないであろう。木幡氏も、「美的価値体験こそ開かれた体験」と考えているし、アリストテレスも、「詩が狙うのは、一般的なものの表現である」と言っている。我々も美の個別性を否定するものではない。しかし美を内包的な上に内在的な価値として、自閉的な方向に導くのは避けねばならないであろう。

(4) 美的価値の妥当性が主観的である事に異議はないが、それが先験的なものであるとするのは一つの立場にすぎない。またこの主観性は、客観性を必ずしも排斥する必要もないであろう。美の客観的評価の事実や可能性も検討してみることが出来る。

美的判断の構造分析から導びかれる美的価値の特徴の解明は、その分析の論理性がまず確認されなければならない。そのため我々は、価値問題の根本をさらに検討して行きたい。

### 3

価値意識は主体的なものであるが、それは主客の客観的な現実的な矛盾に規定されて成立したものと見るなら、客観的基礎を持っているのであり、ただ空想的なものではない。さらに価値の客観性は、単に価値主体と対象との関係においてではなく、価値主体相互の社会的関係においてとらえる。この様な見解から高田純氏は、次の様に言う。「価値の主体と客体、および相互の関係は、社会的に媒介され、条件づけられている。第一に、価値の対象、素材は、他人との活動の交換、コミュニケーションをつうじて社会的に与えられる。また、多くの対象は、個々人が価値評価を与えるにさきだって、すでになんらかの価値をおびてあらわれる（文化的なもののはすべてそうである）。第二に、価値意識、価値主体の形成も一定の社会的、文化的条件のもとでおこなわれる（たとえば、どのような原初的な欲求も、現実には、たんに生理的ではなく、すでに社会的、文化的形成の所産である）。個々人の価値意識は、すでに社会的に形成された価値意識体系（イデオロギーを含めて）によって条件づけられる。」<sup>(14)</sup>

しかしまたこれに加えて、個人の価値の客観性は、各人の価値の多様性の否定によってではなく、その個性的な諸特徴の基礎の上に形成されるという視点も忘れてはならない。特に美的価値における個性の重要さは、論をまたない。個性的な美的価値は、社会的客観性に媒介されていると言える。

ところでヘラーによれば、人類すなわち社会性と発生を共にする価値指向カテゴリーの第一次的なものは、〈よい＝わるい〉である。このカテゴリーは、価値関係の中で無条件に普遍妥当性を持つとされる。<sup>(15)</sup> とすれば、〈よい＝わるい〉のカテゴリーが普遍妥当性を持つだけでなく、それによる評価は社会性と共にあり、そう

した客観性と普遍妥当性がある。このカテゴリーは、当然に美にも適用される。我々も良く知っている様に、美の語源は〈よい〉である。〈美＝醜〉は、二次的価値指向カテゴリーの一つである。そして二次的諸価値指向カテゴリーには、ヒエラルキーがある。「それも、社会という視点からみても個人という観点からみても、である。社会的には、道徳的指向カテゴリー（善と悪）が、つねに最上位に位置している。いうまでもないことであるが、これらのカテゴリーは個別的な個々人にたいして類的性格をもつよう要求する。疎外の結果、また実存と本質、類的な富と個人的な富との分裂の結果、道徳的（ということ、だれにでも妥当する価値ということである）はしばしば命令的形態をとるが、他方、その他の指向カテゴリーによってみちびかれる関係は、むしろ願望的なものにとどまっている（個別性によってみちびかれる人間は、『どっちみち』快適なものと有益なものを求めようとするが、しかし彼は、善なるものへ向かう義務を負わなければならない）。」<sup>(16)</sup>

ヘラーはまた、次の様な二重のヒエラルキーも指摘している。「価値物は、それが基礎的なものであるかどうか、それが不可欠なものであるかどうかに応じてヒエラルキーをもち、しかも価値の高さという観点から決められたヒエラルキーをもっている。いちばん基本的な価値は生命であって、〔中略〕基本的価値（不可欠な価値物）は、与えられた生命過程（財物としての）維持にかかわる価値選好の全体である。不可欠性のヒエラルキーのなかでは、対自的な類的客体化にはあまり上位の位置が与えられない（それは、とくに芸術や哲学に言えることである）が、価値の高さにかんしては、それらは『第一級の』価値物に共属するのである。〔中略〕不可欠性のヒエラルキーが価値の高さのヒエラルキーに接近していれば（その場合には価値の高い財物も基本的なものとみなされる）、疎外の程度は低い（古代アテネの場合など）。反対に、価値の高さのヒエラルキーが不可欠性のヒエラルキーに近づく場合には、疎外はもっとも大きくなる（生産や貨幣が価値の高さのヒエラルキーにお

いても上位の位置を占めている資本主義の場合)。<sup>(17)</sup>

ヘラー女史のこの説明には若干の疑点もあるが、今はそれに触れずにおくこととする。ともあれ我々は彼女の分析を応用して、美的判断の妥当性のあいまいさには、美的価値が望ましきものとして、義務的でない願望の位相にあるものとして、価値の本質の極めて本来的な表現があると言えよう。また美的価値が名実共に必須となるところに、社会性や価値の、そして人間の本質諸力の十分な開花があると思う。それは下に引用するトゥガリノフの要約に示された、価値関係の真に十全な統一と実現であろう。「価値的關係は、客体的なものと主体的なものとの、快適なものと有用なものとの、感性的なものと理性的なものとの、本能的なものと意識的なものとの、生物学的なものと社会的なものとの統一である。」<sup>(18)</sup>

#### 4

美的価値を他の諸価値と比較して、その特性の理解を深めることが出来る。比較考察の一例を、次に引用する岩崎真澄氏の分析に見てみることにする。

「まず、快と功用とは人間存在の日常性にもっとも近接する实际的価値で、その様相はあらゆる日常性がそうであるように、情況によって千差万別で尽きるところを知らない。それらと美とはどのように関係するかといえば、第一には、こういう实际的価値はこのように多様で繁雑、目的や条件によって左右される他律的価値であるが、美はそういう物質的・感覚的なものの支配をのり越えた自律的価値であり、また感覚から入る点は快に似ているが、さらにそこには精神的なものが参加していて深さがある。美が人間自覚の場であるとせられるのは、ひとえに美特有のこの精神的深さによるものと考えられる。

つぎに、真と善とはいずれも人間存在に文化を充実し高める原動力となる高度の精神的価値で、同時に他のいかなる価値ともとり替えることのできない自律的価値である。この点では、美もまた同じである。しかし、前2者は真にあっ

ては客観的、善においては規範的、そういうちがいはあっても、ともに普遍妥当性と要求性をもっている。これに対して、美は主観的で、自由で、さらに個性的性格をもっている。」<sup>(19)</sup>

岩崎氏のこの説明は、美の特性を概略的に示している。しかし一般に認められる美の性格の幾つかを欠落させていたり、我々がこれまで批判的註解として注意した問題観点に立入つてなく、そのため直ちに納得は出来ない。例えば快や有用は、感覚的・实际的次元に限定されるべきものかどうかの検討も求められる。このことと美との関係や違いについてのさらに深い考察の結果が加味されるべきであろう。また美から妥当の要求性が排される理由も、詳らかでない。さらに美が自律的価値であると判定するのも、問題が残る。何故ならまず第一に、生物学的なもの、精神的喜びとしての有用、仮定的次元での有用も、美の重要な契機と考えられるからである。第二に、すでに以前に触れた様に、カントが範例的とする美の妥当性、あるいは歴史的社會性に基づいた美の客観性が指摘される。第三には、美が相対的に独立したものであることを我々は認めるが、それを全く自律的と考えるなら、他の人間的諸価値と切り離されることにもなろう。

ところで木幡順三氏が美的価値の意義への観点として挙げたものの中には、さらに配慮ある分析が見出される。それらを列記すると、次の様になっている。<sup>(20)</sup>

(一) 美は真や善とならんで、精神的な理想価値の一環をなす。それは実現したく思う価値、追究すべき価値の一つである。美は感性的現象でありながら、それにとどまらず、深遠な精神的意義を開示する。

(二) 美と真には共通点がある。それらは共に静観的態度によって実現される価値である。

(三) 美は、ある意味では、偽とも関係している。芸術的表現における〈真らしさ〉では、虚構が美と結んで、自己を価値的に変質させ、高めている。また不条理や欺瞞性を題材として、芸術美が成立することもある。

(四) 美は、有用性、快適さと並んで、〈よさ〉の

価値に属する。特に善と美は、カロカガティアの概念の様に、結合している。

(五) 美と悪が結合し、美が悪を莊嚴することがある。このことは、美的価値が倫理的価値と本来異った次元であることを示す。芸術的価値を媒介として、倫理的価値が美的価値を担うものになるとも言える。美の純粹性は、倫理的消極性と結んだり、倫理的中性の領域に踏みこむ可能性もある。そこには、カントの自由美の様に、内容空疎な形式的な美となる懼れがある。美と悪のかゝわりは、〈美の深さ〉を探す緒口ともなる。美的価値は、人間存在の最深の基底層に根ざし、倫理的価値とその内実を分かちあっている。悪そのものの深さが、形而上学的・宗教的など根源的に問われる状況では、既成道德の体系は規範的意義を失い、芸術美と悪の結合は深層で実現される。

(六) 美的価値が他のすべての価値より優越するとみなす立場が成立ちうる。唯美主義、耽美主義がある。また美と聖とのつながりは、〈美の高さ〉を暗示する。美と聖が結ばれるとき、美は他の価値に優越する高い位置を占める。ただ美の高さは不安定であって、つねに下降の危険にさられる。

(七) 美的価値は非日常的（超日常的）な性質をもち、すべての効用価値から脱却している。日常的習慣の知覚過程を一挙に超出する新しさの経験としての、単に感覚的衝撃ではない根本的な驚きにより、美的価値は効用価値の支配する日常世界の秩序を一挙に超える。

(八) 美は現象する価値である。美的対象は、単なる感覚的現象にとどまらぬ広義の現象性において、その美的価値を認められる。これに反して美以外の価値は、現象性を必要条件とはしない。美的価値における現象性の契機は、ただ単に対象が意識に現出することを指すだけではない。現象それ自体の目的論的終極（エンテレケイア）に達して、はじめて美的価値の契機となりうる。現象する価値としての美は、すべての価値を自己の内容契機として包みこむ形式的契機である。この〈形式〉は対象の形式美と同じ意味で捉えられるのではなく、自律的価値契機

として考えられる形式である。

(九) 美的反価値や美的価値否定について考察するのは、価値そのものの構造を知るのに有意義である。醜は狭義の美の価値性に反対のものであるが、その積極的な現象性故に、広義の美に属することを妨げられない。現象性が衰弱すると、美の品質は消失し、価値的に中性となり、非美的となる。

木幡氏の上記の考察は様々な解明であり、これまで我々も検討して来た諸要点も含まれており、この点については重ねて確認や言及はしないこととする。ただ以下の我々のコメントにおいて、若干の探究方向は提示しておきたい。

(一)については、価値は望ましきものであるから、「実現したく思う」ということだけでは、理想価値の説明として不足であろう。(二)では、無関心性は理解できるが、美の実践（表現）への観点が補足される必要があろう。(三)芸術表現形式や題材としての虚偽は、普遍の認識論や倫理学では美の世界が解明され難いことを示している。ただし偽を通じての美的価値の実現にも、真実が欠けるのではないであろう。(四)をヘラーの用語を借りて整理すると、一次的価値指向カテゴリーの確認であり、二次的価値指向諸カテゴリーによる諸価値間の関係を見ることがあろう。(五)の指摘は意義深い。そして美の純粹性は、最終的には倫理的純粹性と結ばれることを知るであろう。(六)美が理想として、聖なるものと結ばれる事実を我々は知っている。ただその歴史的社会的必然性については、検討が求められよう。(七)このことによって、現実と美の関係や日常世界の美によつての問題が忘却されてはならないであろう。(八)美的形式と内容の結合を、エンテレケイアに達した現象として考えることは出来る。ただし未完成の美とか、目的論の内容については検討されなければならないであろう。(九)反価値(Umwert)が、論理的にあるかどうかは議論になるところであるが、対立価値は認められる。また醜を美にいれる根拠が現象性とされるところも議論になろう。なお、非美的で積極的な現象も存在すると言えよう。

美的価値問題の根本である、美と真や善への

関係をはじめ、美的価値の諸相と諸項に関して、竹内敏雄教授がかなり徹底的な研究を行った。<sup>(21)</sup> 我々の問題展開は、それへの参照にゆずって学ぶことが出来るし、それについての我々の論評は未熟なまゝなので提出しないでおくこととする。

## 5

価値世界に生きる我々は、価値論的観点に主導されている。〈欲に目がくらむ〉とかくあばたもえくぼ〉と言われる様に、価値判断ないしその潜在的な基盤としての価値意識は、事実判断に影響を与えると、見田宗介氏も指摘している。<sup>(22)</sup> だからこそ正しい価値観が求められるのであり、美についてもこのことは一般に適用されるのであろう。しかし実際には、価値が誤認される状況に我々は生きている。トゥガリノフは、これについて次の様に述べている。「現実的価値であるものと人間が価値とみなすものとのあいだに大きな不一致が存在している〔中略〕。この不一致は次の二つの基本的形態であらわれる。すなわち、(1)人間は価値のあるところに価値を見ない。(2)人間は現実には価値でないものを価値とみなす。」<sup>(23)</sup>

我々はともかく、価値の本来的で正当なあり方と、その美的価値における意義や展開を中心に知ろうとしている。当初我々が設定した様に、精神的価値を形而上学的本質から見て行くのであれば、一般に人間性を基礎にしているのであり、美も芸術も享受者や芸術家の主観・人格と係っているものと考えられる。従って、人間性の質や様態に応じて、美的価値も規定されるところがあると言えよう。人間性が発展するものなら、美的価値も発展的であり、永遠なる人間性には、永遠な美が伴うことになる。人間性の充実には、美的充実がある。しかし充実といっても、単に華やかな豊かさだけでなく、そこには純粹性や、強度(たとえばかなさであっても)など、様々な要因が加味されて考察されるべきである。

この様に美的価値が人間性を原理としている

事は、竹内敏雄氏も次の様に解説している。「人間的に価値あるものの総合的全体を全人間的価値(der gesamtmenschliche Wert)と称するならば、すべての個別的価値は根底においてはもろともに全人間的価値の総体性へ帰入し、この共通の基盤において根源的につながりあっている。

〔中略〕個々の人間的価値は一なる根源から発して各自の領域へ分化するのである。」<sup>(24)</sup>「自律性と汎律性の二重構造にもとづいて美は純粹に美的なるものとしての調和性を保持するとともに、他の価値への関係から一層人間的意義にみちたものへ拡充される。美的価値それ自身の固有の原理がさきにあげたような両極的契機の諸対立の調和にあるとすれば、<sup>(25)</sup> それはまたすべての人間的価値に共通する実存的有意義性の原理と結合するのである。美的領域においてもそれゆえ調和の原理のみが支配するのではなく、これは人間的有意義性の原理によって補完されなければならない。」<sup>(26)</sup>「本来、感覚的かつ精神的な価値である美こそ、もっともヒューマンな価値である。」<sup>(27)</sup>

我々はこの原理を踏まえて離れることなく、美的価値のさらに系統的な分析に向うであろう。以上に検討して来た諸見解に啓発されて、一層の追究と意義ある解明を他日に期することとする。

## 註

- (1) アグネス・ヘラー『マルクス主義的価値論のための仮設』(邦訳、法政大学出版局、1980年)、37頁。
- (2) 同上書、36頁。
- (3) 同上書、39頁。
- (4) 同上書、44頁。
- (5) 同上書、46頁。
- (6) ヴェ・ペ・トゥガリノフ『価値とはなにか』(邦訳、大月書店、1979年)、25頁。
- (7) ヘラー、前掲書、88頁。
- (8) 同上書、82頁。
- (9) 同上書、86～88頁。
- (10) 高田純『価値論の基礎的諸問題』(岩崎允胤編『価値と人間的自由』、汐文社、に収録)、18～19頁。
- (11) 同上書、19～29頁。
- (12) 木幡順三『美と芸術の理論』(勁草書房、1980年)、



第二章第十三節。

- (13) 同上書,第二章第十一節。
- (14) 高田純,前掲書,24頁。
- (15) ヘラー,前掲書,四。
- (16) 同上書,71頁。
- (17) 同上書,89～90頁。
- (18) トゥガリノフ,前掲書,79頁。
- (19) 岩崎真澄『美的価値とその周辺』(ノートルダム女子大学研究紀要,第3号1971年,12頁)。
- (20) 木幡順三,前掲書,第二章第十二節。
- (21) 竹内敏雄『美学総論』(弘文堂,昭和54年),本篇第五章。
- (22) 『社会科学辞典』(鹿島研究所出版会,1968年)3,219頁。
- (23) トゥガリノフ,前掲書,114頁。
- (24) 竹内敏雄,前掲書,395頁～396頁。
- (25) 目次的に概略して挙げれば,表現上の調和(直観性と感動性,形象と内容),形成上の調和(法則性と自由性,形式と充実),表現と形成の調和(原体験とその形式,素材と様式)である。同上書,本篇第四章。
- (26) 同上書,397頁。
- (27) 同上所。

(本学助教授・美学)

〔昭和59年12月20日受理〕